

「特別の教科 道徳」授業実践の指導体制の確立を目指して

館林市立多々良中学校

- 主 題 互いを認め合い、よりよい生き方を追求する生徒の育成
－「考え、議論する道徳」の授業づくりを通して－
- 校 長 岩上 博志
- 生徒数 365名
- 学級数 13学級
- 執筆者 教諭 高島 広平
- 住 所 〒374-0075 館林市西高根町50-23
- 電 話 0276-72-4025
- U R L <http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/school/chu.tatara/>
- 支 部 館林市教育研究所



1 はじめに

平成27年3月に一部改正学習指導要領が公示され、「道徳」が「特別の教科 道徳」になり、中学校では2021年度から全面実施となる。各学校においては、改正の趣旨を踏まえた道徳教育の充実に向け、準備を確実に進めることが求められている。これは、これからの生徒たちのよりよい生き方のために生徒の道徳性向上に向けた取組が必要であることを示唆している。それは本校の生徒についても同様であり、毎年人間関係に不安を抱える生徒が増えてきている現状からも真剣に考えていくべき喫緊の課題である。そこで、生徒の道徳性向上を目指すことをねらいとし、本校では「特別の教科 道徳」の全面実施を見据え、道徳教育を軸とした校内研修を学校全体で推進していくこととした。そして、道徳教育の推進体制を見直し、校内研修体制を整備する中で、「考え、議論する道徳」を行うための指導方法や学習環境を改善・充実させていくことにより、生徒の道徳性を養うことができる考えた(図1)。平成30年度は、道徳に関する研修の1年目として、道徳の授業づくりやいろいろな環境整備など、様々な

角度から検証を行い、本校の実態と課題を明らかにしていくことを目標とした。

2 研究のねらい

「互いを認め合い、よりよい生き方を追求する生徒の育成」のために、研修2年目に向けた「特別の教科 道徳」の授業実践の基礎・基本となる組織的な指導体制の確立を図る。

研修のスケジュール

研修のスケジュール		授業改善研修	資
4	9日	推進：1年間の研修の方向性	全体：「通知表の目
		研修計画書についての検討	全体：「支援が必要
	16日	全体：1年間の研修の方向性、簡略スケジュール 研修計画書の共通理解	全体：「アレルギ-
	24日	推進：スケジュールの確認 前期指導主事訪問の授業者・指導案形式決定	
5	1日	全体：前期指導主事訪問の事務連絡	全体：「C&S調
	9日	推進：授業改善に向けた具体的な手立ての検討	全体：「学校安全
	16日	全体：アンケート調査による重点価値項目実態調査	
	21日	全体：道徳の教科化における授業づくりについて①	
	28日	班：前期指導主事訪問の授業実践について	
6	11日	全体：道徳の教科化における授業づくりについて② 前期指導主事訪問	全体：「救急救命
	20日	(研修の概略説明・一般授業・授業研究会)	全体：「熱中症予
	21日	推進：前期指導主事訪問の反省、今後に向けて	
7	9日	全体：道徳の教科化における評価作成について	全体：「自転車の
		班：授業実践に対する振り返り	
8	20日	推進：中期指導主事訪問にむけて	全体：「道徳の教科
		全体：新学期からの道徳の授業体制について 授業改善に向けた具体的な手立てについて	全体：「発達障害の
9	3日	班：道徳代表授業についての指導案検討会①	教科：「NR T分
	6日	推進：中期指導主事訪問における手立ての検討	

図1 年間研修スケジュール

3 研究の内容

(1) 教科化に向けた組織的取組（量的改善）

ア 年間指導計画の見直しを行い、内容項目チェックシートを作成し、計画に沿った授業時数の確保と内容項目を確実に行う。

イ 各学年部会で道徳の授業形態の工夫を行い、道徳の授業づくりに全職員が参加し、授業改善に向けた参観・検討ができる研修環境を設定する。

(2) 教科化に向けた指導力向上の取組（質的改善）

ア 本校の道徳実践の基盤となる指導観形成に当たって、年度内でのPDCAサイクルによる実践と改善を学期ごとに行う。

イ 「考え、議論する道徳」に近付くために、テーマ提示の工夫と意見交流活動の工夫を手立てとして初期設定し、年間を通した授業実践と改善に取り組む。

4 実践の概要

(1) 教科化に向けた組織的取組（量的改善）

ア 授業時数の量的確保と計画的指導

道徳科の授業については、年間指導計画に基づいて実施する。全教職員の共通認識として「第〇回」の道徳授業と生徒に対して明示し、35時間の授業が確実に行うことができるように工夫を行った。22の内容項目についても、年間指導計画に適切に位置付けて取り扱うとともに見える化し、内容項目チェックシートに記入していくことでより内容項目を意識した取組を行うことができた（図2）。

「特別の教科 道徳（道徳科）」の内容項目の一覧

中学校の内容項目	キーワード	資料名	日付
A 主として自分自身に関すること			
(1) 日常の行動を振り返り、主体的に考え、判断し、結果に責任を持ってその結果に責任をもつこと。	自主、自律、自由と責任	11 テラップアウト 12 リクエスト	6月5日 7月10日
(2) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、新境を切り拓く心構え、応急で判断のある生活をすること。	態度、節制	4 小さなこと	5月8日
(3) 自己を責めつめ、自己の向上を図るために、個性を伸ばして実化した生き方を追求すること。	向上心、個性の伸長	3 皮	5月1日
(4) より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と裏切りをもち、困難や失敗を乗り越えて果敢にやむを辞さないこと。	目標と熱意、覚悟と強い意志	13 ロスタイムの戦い	6月19日
(5) 真実を大膽に、真理を探究して新しいものを生み出すこと。	真摯の研究、創造		
B 主として人との関わりに関すること			
(6) 思いやりの心を持って人と関わり、家庭及び支那の人々の需要により自己の生活や受身の自分があることに感謝し、謙虚にそれに応え、人間愛の精神を養ふこと。	思いやり、感謝		
(7) 礼儀の規範を理解し、特に重んじた規範の行動をとること。	礼儀		
(8) 互いの尊厳を尊重し、心から信頼できる関係をもち、思いやりの心、思いやり、思いやり、思いやりに、互性についての理解を深め、絆みや美徳も理解し、ながら人間関係を築いていくこと。	友情、信頼	2 輪子と輪子	4月8日
(9) 自分の考えや意見を相手に伝えること、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方をめぐることを通じて、寛容の心をもって謙虚に他人と関わり、自らを磨いていくこと。	相互理解、寛容		

図2 内容項目チェックシート（6月時）

イ 担任・副担任参加の授業形態の工夫

全学年の道徳の時間を校時表で同じ時間に位置付け、学校全体・全職員で道徳授業を行うことができるように設定をした。また、学習指導要領において「学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実すること。」を受け、各学年の職員のキャリア段階や生徒の特性に合わせ指導形態の工夫を行った。（○成果●課題）

(ア) 第1学年

授業提案者を学年職員全員で輪番制とした担任が授業を行うローテーション授業を採用した。

○初担任や初任者が学年に所属しており、道徳の授業づくりの進め方などにおける経験の差をフォローすることができた。

○中学校最初の学年であり、毎回担任が担当することで落ち着いて道徳授業の基盤を作っていくことができた。

●キャリア段階の高い中堅・ベテラン教師の実際の授業を参観することができず、実践中心の指導形態となった。

(イ) 第2学年

担任・副担任が定期的に交換して授業を担当する相互参観授業を採用した。

○若手の担任が多く学年に所属しており、担任3回・副担任1回のペースでの実践・参観のバランスが適度であった。

○副担任も準備の時間をしっかり確保することができ、専門性・特性を生かした授業づくりを行うことができた。

(ウ) 第3学年

担任T1・副担任T2での複数教員によるTT授業を採用した。

○机間指導をT1・T2で行うことで生徒の意見の収集や評価をきめ細かく行うことができた。

●事前打ち合わせをしっかりと行い、T1の授業づくりの方向性の意図を汲み取った支援が必要になる。

(エ) 次年度に向けて

成果と課題を受けて、次年度は担任T1・副担任T2で定期的にT1・T2を交代して

授業を担当するTT相互参観型の授業を全学年で採用していく予定である。評価に関しても担任のみで評価するのではなく、TTによる授業で学年職員と協力をして客観的な評価を行っていく必要がある。

(2) 教科化に向けた指導力向上の取組（質的改善）

ア 道徳授業実践におけるPDCAサイクル

本年度の本校の校内研修は、仮説検証型の研修ではなく、授業改善研修の取組を進めた。一人一人の実践をPDCAサイクルとして集団で共有し、定期的に授業検討を実践していくことで、指導力向上に直結させていくことをねらいとした（図3）。また、次年度の道徳実践の基盤となる指導観形成についても、授業づくりの課題解決に向けた取組の中で共有することを目的とした。

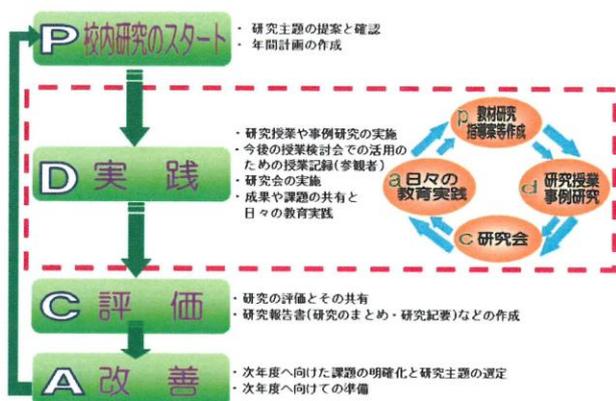


図3 指導力向上に向けたPDCAサイクル

「考え、議論する道徳」に向けた共通の視点を設定した授業づくりを各学期に行い、キャリア段階を意識した班編成での授業研究会で、話し合いを活性化させた（図4）。



図4 授業研究会での話し合いの様子

イ 「考え、議論する道徳」を目指して

(ア) 1学期（PDCAサイクルⅠ）

文部科学省『「特別の教科 道徳」の指導法・評価等について（報告）」では、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」の三つを質の高い指導法として例示し、これらを組み合わせた指導を推奨している。本校では「考え、議論する道徳」に向けて「問題解決的な学習」に視点を当てた授業づくりを行った。初期段階の授業づくりの手立てとして、i「導入場面における価値への方向付けをより明確にするためのテーマ設定の工夫（以下、手立てi）」、ii「展開場面における価値の追求をより深化するために、授業に応じた意見交流活動の形態の工夫（以下、手立てii）」の二つを提示した。

i 「導入場面における価値への方向付けをより明確にするためのテーマ設定の工夫」の設定について

「問題解決的な学習」を行うためには、生徒の「主体的な学び」の実現が必要であり、生徒自身の問題意識が不可欠である。さらに、生徒の問題意識と教師が学ばせたい主題との重なりが大きくなればなるほど、学習テーマは鮮明となり、生徒の学習意欲は高まる。そこで、生徒自身が問いを生み出せるように導入場面でのテーマ設定の工夫を手立てiとして取り入れた（次項図5上）。また、テーマ設定を充実させることで「～にはどんな意味があるのか」「～はどんなことが問題なのか」といった主題や道徳的価値に着目した「テーマ発問」などにも応用でき、生徒が大きな視点で問題を追求するきっかけをつくることもできると考えた。

ii 「展開場面における価値の追求をより深化するために、授業に応じた意見交流活動の形態の工夫」の設定について

「主体的な学び」と同時に、言語活動を積極的に取り入れた「対話的な学び」を通して、生徒の情報共有の輪を広げることも重要であると考え。他者の考えに共感しつつ、互いに学び合うことを通して道徳的な価値を深めることができるように、展開

場面での意見交流活動の形態の工夫を手立てiiとして取り入れた（図5下）。

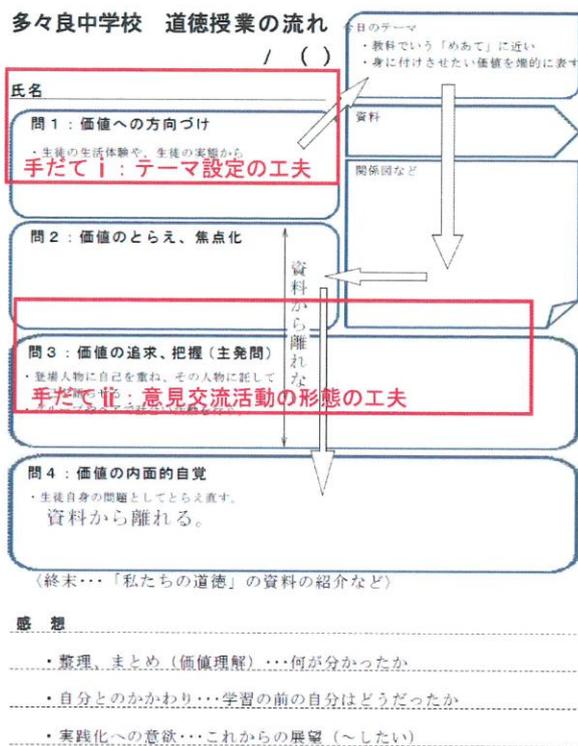


図5 道徳授業の流れ（初案）

1学期は、道徳の教科化に向けた先行した取組として教員の課題意識に合致した研修を行うことができた。従来の道徳からの大きな変化を目的とするのではなく、手立てを二つにしばったことで足並みを揃えた授業づくりができた。教職員が積極的に手立てを取り入れ、よりよい道徳授業にむけた意識向上の点で有効であった（図6）。その中で見えた課題は、二つの手立てが、形式的な手段となっていないかということである。



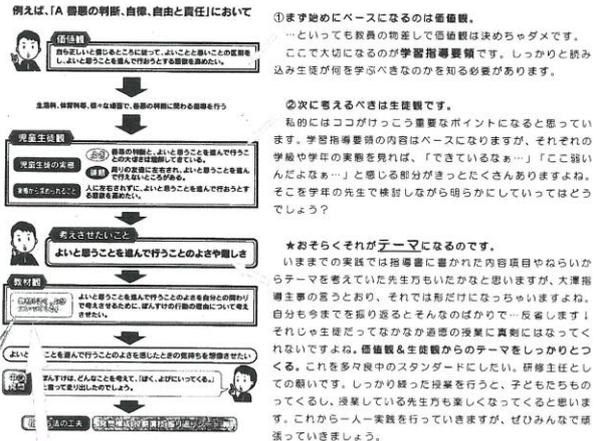
図6 役割演技を取り入れた授業

あくまで二つの手立ては問題解決的な学習を展開するための手段である。授業者の指導観が明確になっていない授業では、手立ての有効性は極めて低い。そこで、平成30年3月に群馬県教育委員会から提示された「はじめよう！道徳科」の資料を基に、再度明確な指導観の形成についての授業改善研修を全体で行った。

一学期道徳実践の振り返り

H30.7.9

(1) 授業づくりのスタート（テーマの設定の工夫のために…）



③最後の大切な大切な教材観
テーマが決まればほとんど見出しが見えたら自然です。しかし実際の授業は読み物資料によって左右されてしまうケースが多いです。副読本の中にある読み物資料には、一つだけでなく、複数の価値が含まれています。例えば「よいと思うことを選んで行うことの良さや楽しさ」がテーマだったとしても、良いと思うことを行った結果、誰かが傷ついた資料を使ってしまうでしょう。その資料を読んだだけでは、おそらく命も大事となり、「生命の尊厳」が価値となり価値がぶれてしまう可能性があります。副読本の読み物資料は、複数の価値項目が含まれているので、テーマに沿った発問でポイントを絞っていく必要があります。さあ発問について考えていきましょう。

図7 研修資料（明確な指導観をもつ）

全体研修において「①学習指導要領を基盤とした価値観」「②生徒の実態とそこから求められるものを明らかにした生徒観」「③考えさせたい内容をどのように資料を生かすかを考える教材観」の順に授業者の「ねらい」を構成するようにした。それを受け、指導観を明確にしていくことが授業づくりのスタートとなることを再確認した。中でも、導入場面において「手立てi テーマ設定の工夫」を行うことは、テーマを提示することが目的ではなく、授業者の指導観に基づく「ねらい」を受けて、生徒の問題意識が高まることを目的とした手段であることを共通理解することができた（図7）。

また、授業者の指導観が明確になれば、授業の「ねらい」に適した意見交流形態を選択することができ、原理・根拠・適用と各種類の発問に応じた意見交流形態を選択することで、生徒の多面的・多角的思考活動を

促すきっかけになることを全体で確認できた。

(イ) 2学期 (PDCAサイクルⅡ)

2学期は、1学期の課題を踏まえた実践・検討の場面を多く見ることができた。価値観・生徒観・教材観を踏まえた授業構想を目指し授業づくりの時間を確保し、学年で授業構想を練ることができた。また、授業の導入場面で「手立て i テーマ設定の工夫」を取り入れたが、教員が価値を理解し、多くのアイデアや工夫を出し合いながら価値への方向付けへの問題意識をもち、見通しある授業実践とすることができた。学期ごとの教師用アンケートには「授業づくりに向けた準備をより考えるようになった。」「道徳について先生方と話す機会が増えた。」と記載があり、道徳科への第一歩が踏み出せている様子である。

更に授業実践の場を増やし、授業づくりとともに参観授業を通して学びを深いものとするために、2学期は9月・10月に道徳強化週間(道徳WEEK)を設けた。全学年同じ時間割で行っている道徳の時間の時間編制を組み換え、学年や学級の垣根を超えた相互授業参観ができる期間を設けた。

相互に参観することで、若手教員は授業づくりの基礎を吸収し、中堅・ベテラン教員は工夫・改善のヒントを発見するなど、互いの技能・意識が高め合える学び合い活動の場を目指した。あらかじめ示された授業者の指導観(図8)に迫るために、導入・展開・終末にそれぞれ参観の視点をもって授業参観することで、その後の授業研究会も活発な意見交換が行われ充実した研修期間とすることができた(図9)。

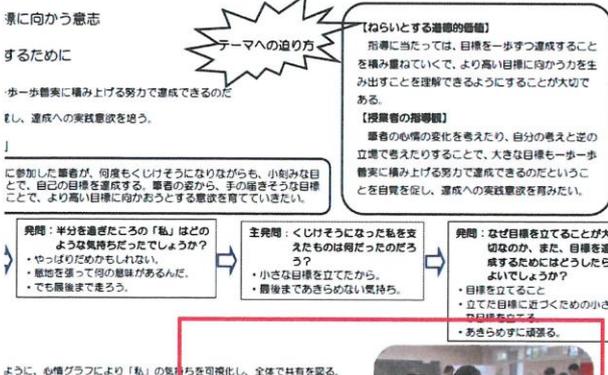


図8 道徳WEEK一人1実践のまとめ

道徳WEEK 授業参観記録用紙 9月分 氏名(

9月 日() 校時 授業者(先生)

テーマ『 』 ⇨ 主発問:

学習活動	工夫点・参考点	疑問点・改善
導入 【価値への方向付け】※テーマの効果は?		
展開 【自己の振り返り】※話し合い形態の工夫は?		
終末 【価値の深化】※価値を深めた様子があるか?		

図9 参観の視点をもった授業参観用紙

2学期の実践では、授業者の指導観を明確にした「手立て i テーマ設定の工夫」を充実することができた。しかし「価値理解」を追求するあまり、授業の展開部分では「人間理解」に関する発問を生徒に投げ掛けることが少なかった。授業参観記録用紙からも「もっと揺さぶりをかけると幅広い考えが出てくるのではないか。」や「テーマに対しての前向きな意見が多いが、実際にはその心情や判断が難しい場面も多数あるのでは。」など、多くの教員からの指摘が改善点の欄にあった。そこで、群馬県教育委員会事務局から提示されている「道徳・授業構想チェックシート」を基に、生徒の心を揺さぶる発問構成の工夫の全体研修を行うこととした(図10)。

資料名	絵はがきと切手	内容項目	2-(3)	主題名
☆指導観に取り入れているかチェックしましょう		指導観に入っていない場合には、どのような内容を入れたらよいのか		
【価値観】 ねらいとする道徳的価値についてどのように考えるのか、学習指導要領等の記述を基に明確にする。	×	この時期の児童は、気の合う友達同士で仲間をつくらせて楽しむという活動などがこれまでに多く盛んになる。しかし、自分の利益なども考えられる。このような状況から、この段階においては、積極的に育成していくことが大切であり、友達のことを互いによく理解することを中心として指導する必要がある。		
【児童生徒観】 ねらいとする道徳的価値について、児童生徒がどのような状況にあり、どのような児童生徒が育ちたいのかを明確にする。	×	アンケートの結果から、クラスの約8割の子が、仲の良い友達に恵まれていると感じていることが分かった。友達だからこそ正しいと大切だということに気が付いた。		
【教材観】 指導者の価値観、児童生徒観を基に教材(資料)をどのように活用するかを明確にする。	×	友達の間違いに気が付いた主人公の立場を考へさせ、自分の道徳的価値にせまらした。		
【価値理解】 ねらいとする道徳的価値が大切であることに気付く	×	(中心発問) どんな気持ちから間違いを教えようと思ったのでしょうか。子どもの反応例…正すなら自分の気持ちを分かってくれと思へる。		
【人間理解】 道徳的価値に根ざした行為は容易ではないことに気付く	×	(発問) 返事を書こうとして、どうして迷ってしまったのでしょうか。子どもの反応例…教えた方がいいけど、正すのを待つてしまうことに気付く。…教えたから聞かれないかもしれない。		
【他者理解】 道徳的価値に関する感じ方・考え方は人によって様々であることを気付く	×	グループでの話し合いを設定し、道徳的価値の捉えは、人によって付かせる。		
【資料から読み取る】 自分との関わりで道徳的価値を捉えること	×	(発問) 今までに友達のことを思っ、言いたくても伝えられなかった。子どもの反応例…尊敬の考えを教えている友達に、「やり方が道徳的だからだよ。」と注意した。…本音の言葉で、ぼろのたま方をもう少しいつことも、言いたくなくて思いついた。		
【今までの自分はどうであったか振り返る場面(価値理解)(自己理解)】 道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を増やすこと	×	(発問) 自分と友達のことを振り返り、大切だと思ったことを書き子どもの反応例…友達だからこそ正しいことを伝えていきたい。…友達のことを信じる気持ちが大切だ。		

図10 道徳・授業構想チェックシート

全体研修では情報共有を行った。生徒が「価値理解」と「人間理解」の間で心の葛藤や揺れを感じる場面に、交流活動を設けることで「他者理解」から考えを深め、自分との関わりを振り返ることができる。また生徒の反応

を適切に予想し、切り返しの発問を何度も投げかけられるような準備が必要である。価値観・生徒観・教材観から授業の「ねらい」を明確にするとともに、中心発問をどこに置かかを吟味し、価値理解と人間理解の間で生徒の心を揺さぶる場面をつくることについて情報共有を行っていく。

(ウ) 3学期 (PDCAサイクルⅢ)

3学期は、2学期の課題を意識した実践を重ね、1年間のまとめに向けた取組を行うことができた。指導案の中に授業構想チェックシートを組み込むことで、「ねらい」に沿った三つの理解を踏まえた発問構成を考えることができ、「対話的な学び」に向けた手立てとして応用することができた (図11)。

過程	学習活動	○基本発問 ◎中心発問 ☆補助発問 ・予想される児童生徒の反応	時間	指導Ⅰ
導入	1 価値への方向づけを行う。 2 テーマを示す。 3 教材を聞く。	○今まで努力したことで成果があったことなかったことについて両方考える。 ・部活、テスト、習い事、入試。 志高く生きるには。		○歌詞共通記
展開	4 道徳的価値を考える。 5 ペアで交流する。 6 道徳的価値についてグループで議論する。	○あなたは医者のおで、恋人もいる。アフリカの子どもたちを助けてほしいと医療活動の誘いがきた。条件は単身で三年以上の勤務。行くか行かないか。その理由は。(両方考えよう) ・行く 人生は一度きり。悔いを残したくない。 ・行かない 日本でも夢は叶う。恋人が大事。 ☆自分だったらどうするだろう。 ・○○さんは行かないのだな。なるほど、夢よりも恋人を優先するのだな。 ☆もし自分が恋人ならどうするか。 ・行かせる・行かせない ○それでは、グループで意見を主張し、それぞれの班で、行くか行かないかまとめよう。 ・難しい部分はあるけど夢に挑戦し続けたいという気持ちはやっぱり持ち続けたい。		○両方考え難し ○両方たどることでよりする。 ○色々なことについて
終末	7 自己を振り返る。	◎志高く生きる上で大切なことは何だろう。 ・夢を追い求め続けることは難しい。どんな壁が出てくるかわからないが、そんな中でも志を高くもってぶれずに生きていきたい。		○生徒わっさせ 変容

道徳授業構想チェックシート

【価値理解】 ねらいとする道徳的価値が大切であることに気付く	◎志高く生きる上で、大切なことは何だろう。
【人間理解】 道徳的価値に根ざした行為は容易ではないことに気付く	☆自分ならどうするか。恋人なら引き止めるか、行かないことに気付く
【他者理解】 道徳的価値に関する感じ方・考え方は人によって様々であることに気付く	・グループでの議論の場を設定し、道徳的価値の振りに気付かせる。

【成果と課題】 ○成果 ●課題

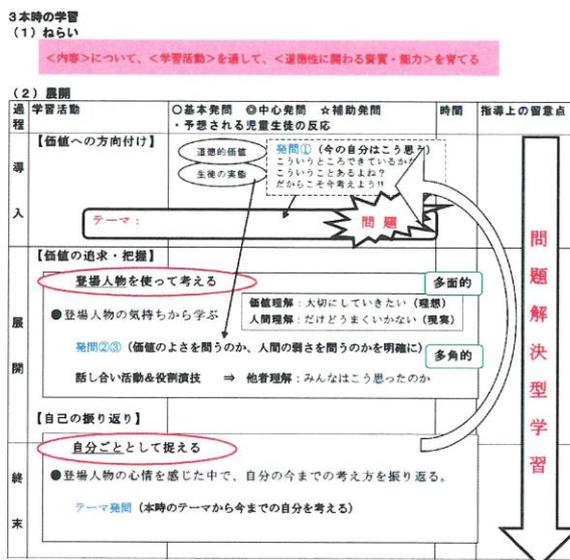
- 生徒が考える時間、ペアやグループで交流する時間等、十分に確保することができたことについて深く考えることができた。
- 恋人の立場として考える中で、自分の時の気持ちとの違いについて、切り返しの発問をり夢を追い求める難しさについての生徒の考えを深めたかった。

図11 授業構想シートを組み込んだ指導案

また、「中心発問と切り返し発問の構成により生まれる揺さぶりが、意見交流活動の活性化につながる」との教員用アンケート結果から有用性を明らかにすることができた。

各学期の実践による授業改善から、年度末

に本校の今後の道徳実践の基盤となる授業づくりのポイントと生徒の思考に合わせた構造的ワークシートを作成した (図12、図13)。



道徳授業構想チェックシート

理解の種類	発問・活動の種類	ねらい・意図
【価値理解】		
【人間理解】		
【他者理解】		

○中心発問 ☆補助発問 □話し合い活動

図12 指導案枠(授業づくりのポイント)

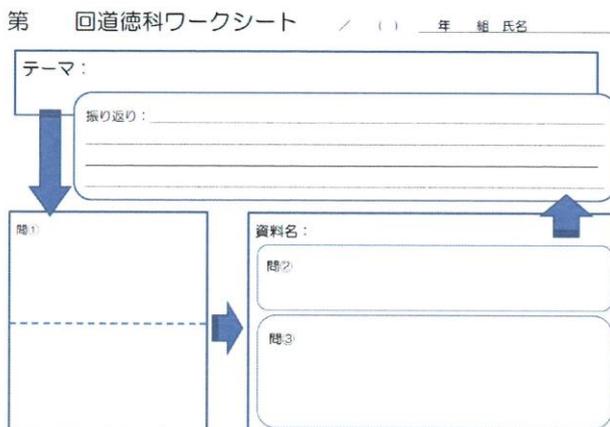


図13 思考手順を構造化したワークシート

5 おわりに

年間を通して多くの実践を重ねることができたのは、本校職員の道徳科授業実践への意識の高さからである。道徳の教科化に向けた組織的指導体制の確立を図るためには、学校全体での連携が必要不可欠である。今年度の成果と課題を踏まえ、全職員での取組を継続し「特別の教科 道徳」の実施に向けた準備をしていきたい。